

言語学習に対する学習者のビリーフと
大学英語教育への期待
——BALLI調査を中心として——

中山 誠一*

1. はじめに

外国語学習における学習者のピリーフ研究は1980年代後半ごろから盛んに行われるようになった。ピリーフとは日本語の論文では、言語学習観、信念、ピリーフなどと訳され、言語学習はどのようなものであるかなど、言語学習に対する信念のことである(片桐, 2005)。本研究ではこのうちピリーフを用いることとする。ピリーフは学習者の学習方略の選択に強く影響を与えているとされており(Horwitz, 1987, 1988; Wenden, 1987; Yang, 1999)、学習者のピリーフを教授者が理解し、それを踏まえて学習者に合った教授法の選択をすることは、学習者の自律学習を促進させるためにも重要なことである(Yang, 1998)。Horwitz(1987)は学習者のピリーフを的確に教授者が把握することが、学習者が外国語学習成功の鍵としている。

ピリーフ研究が盛んになった一つのきっかけは、1987年にHorwitzがBALLI(The Beliefs About Language Learning Inventory)を開発したことにある。34項目からなる質問紙はもともとアメリカの大学でESLとして英語を学んでいる学生を対象に開発され、1)外国語学習能力、2)外国語学習の難しさ、3)外国語学習の特質、4)学習・コミュニケーション方略、5)動機づけの5分野を調査対象とした質問紙であり、この質問紙を利用したピリーフ研究は英語だけでなく多くの異なる外国語学習者を対象に数多く行われている。Yang(1999)は台湾の大学生を対象にした調査で、自己効力が学習方略選択に対し大きく影響していることを検証し、Nikitina and Furuoka(2006)はBALLIを用いて多言語環境におけるBALLIの信頼度を検証した。BALLIの信頼度が高いと認める研究者も数多くいる。(Dorneyi, 2001, p.68; William & Burdern, 1997, p. 90)日本でもBALLIを参考にした英語学習者に対するピリーフ研究は行われており、短期留学がピリーフに及ぼす影響(Ellis & Tanaka, 2003)、佐藤(2006)による言語学習ストラテジー使用に影響を与えている学習信条の研究、過去の学習歴がピリーフと学習方略にどう影響しているかの研究(糸井, 2003; O'Donell, 2003)などが挙げられる。

そこで本研究では学習者の学習方略に影響を及ぼすピリーフを把握することが重要であるという観点から、1. 現在受け持っている学生のピリーフの把握、2. ピリーフと大学英語教育への期待度の関連の2つの点について調査した。そのためにHorwitzによって1987年に開発された34項目からなるBALLIに加え、本学の英語教育への期待度との関連を検証するため横山(2003)の質問紙を参考に、11の項目を付け加えた質問紙を用いて調査を行った。

Learner Beliefs about Language Learning and Expectations to English Curriculum

NAKAYAMA Tomokazu *

Research on learners' beliefs has attracted researchers since the 1980's. Horwitz developed an survey instrument called BALLI (The Beliefs About Language Learning Inventory) in 1987 to investigate learners' beliefs on language learning. This instrument has been used by many researchers to assess learners' beliefs. Learners' beliefs are said to affect learners' choice of language strategies and motivation(Horwitz, 1987,1988; Wenden, 1987; Yang, 1999). It is essential for teachers to understand students' current beliefs on language learning to foster students' autonomy toward language learning. Also according to Horwitz, understanding students' beliefs on language learning and choosing appropriate approaches by teachers can lead students to successful language acquisition.

This paper reports on a study of beliefs held by one hundred and ten university students. The BALLI was used to collect data, which was first analyzed by the criteria set by Horwitz and was later investigated how their beliefs relate to the expectations toward university English curriculum by factor analysis.

* 城西大学助教

2. 方法

2.1 参与者

本学現代政策学部、理学部及び薬学部所属の1年生男女合計110名が参加した。

2.2 問紙の内容

質問紙は45項目の質問項目からなり、前半34項目についてはHorwitz (1987) を日本語訳し、本学学生向けに必要な部分に多少の加筆を行った。質問紙は1) 外国語学習能力、2) 外国語学習の難しさ、3) 外国語学習の特質、4) 学習・コミュニケーション方略、5) 動機づけの計5項目の枠組みの基に作成されており、それをランダムに並べかえたものを採用した。後半11項目については大学英語教育への期待度を測るために横山 (2003) を参考にしたが、医学部の学生を対象にしたものであったので、内容を本学の学生向けに作成しなおした。尺度は5件法を採用した。

2.3 手続き

調査は7月最終の授業終了後、調査の主旨及び内容の説明の後実施した。参与者には回答に対する十分な時間を与えるため、個人差を考慮して終わり次第教室を退出するように指示をした。回答収集後全てのデータはSPSSで統計処理を行った。まず45項目全てを対象に記述統計処理を行い、クロンバック係数に基づき信頼度を調査した。 $(\alpha = .824, N=110, k=45)$ 。最初の34項目についてはHorwitzの1987年のモデルに沿ってデータ分析を行った。その後45項目全てを含めてピリーフと大学英語教育への期待度の関連を探るため、探求的因子分析を行った。

3. 結果

3.1 Horwitz (1987) のモデルから

統計処理後前半34項目をHorwitz (1987) に基づき5つのカテゴリーに分類した。Table 1 から Table 5 にその結果を示す。

3.1.1 外国語学習能力

Table 1 は Horwitz (1987) に基づいて分類した5つのカテゴリーのうち、外国語学習能力に関する項目をまとめたものである。

Table1 : 外国語学習能力

項目	M	SD
1. 大人よりも子どもの方が外国語を学ぶのは簡単だ。	2.15	1.05
2. ある人々は外国語を学ぶための特別な能力を持っている。	3.23	1.07
6. 日本人は外国語を学ぶのは得意だ。	3.57	0.70
10. 既に外国語を話せる人は他の外国語を学ぶことは簡単だ。	3.35	1.02
11. 数学や理科が得意な人は外国語を学ぶのが不得意だ。	3.51	1.04
16. 私は外国語を学ぶ特別な能力を持っている。	4.29	0.86
19. 外国語学習は男性よりも女性の方が上手だ。	3.35	0.95
30. 2つ以上の言語を話せる人は、頭がいい。	2.38	1.05
33. 外国語は誰でも学べる。	1.87	0.81
1. 非常にそのとおりだと思う		
2. その通りだと思う		
3. どちらでもない		
4. そうとは思わない		
5. 全くそうは思わない		

項目1の「大人より子供の方が外国語を学ぶのは簡単だと思っている」については多くの学生がそう感じているが ($M=2.15$)、外国語を学ぶための特別な能力を信じる学生は少なく (項目2, $M=3.23$)、自分自身も外国語を学ぶ特別な能力を持っているわけではないと多くの学生が感じている (項目16, $M=4.29$)。それを裏付けるように日本人が特に外国語を学ぶことが得意であるとは考えていないし (項目6, $M=3.57$)、特に「数学や理科が得意な人が外国語を学ぶことが不得意である」とも考えていない (項目11, $M=3.51$)。1つ外国語をマスターしたからといって、他の外国語を学ぶことは簡単になることはなく (項目10, $M=3.35$)、努力しだいで外国語は誰でも学べる (項目33, $M=1.87$) し、自分も外国語を話せるようになりたいと考えている学生も多い (項目30, $M=2.38$)。従って自分の外国語学習に対しての将来を悲観的に考えている学生はそう多くはないことが明らかになった。

3.1.2 外国語学習の難しさ

次に Table2 に Horwitz (1987) に基づいて分類した5つのカテゴリーのうち外国語学習の難しさに関する項目の結果を挙げた。

Table2 : 外国語学習の難しさ

項目	M	SD
3. ある言語は他の言語より学ぶことが簡単だ。	2.97	1.02
4. 英語 1 とても難しい 2 難しい 3 普通 4 易しい 5 とても易しい	1.98	0.77
5. 私はうまく英語を学べていると思う。	3.78	0.84
15. ある人が一日1時間が外国語を学習したら、その言語を上手に話せるようになるにはどれくらい時間がかかると思いますか。	2.82	1.13
25. 外国語を理解するより話すほうが簡単だ。	3.17	0.98
34. 英語は聞いたり話したりするより、読んだり書いたりするほうが簡単だ。	3.04	1.10
1. 非常にそのとおりだと思う		
2. その通りだと思う		
3. どちらでもない		
4. そうとは思わない		
5. 全くそうは思わない		

英語は難しい言語であり (項目 4, $M=1.98$), 今までの自分を振り返っても自分はあまり上手に英語を学べていない (項目 5, $M=3.78$) と考えている学生が多いことがわかる。項目 15 の「ある人が一日 1 時間外国語学習をしたら, その言語を上手に話せるようになるにはどれくらい時間がかかりますか」の問いに対しては, 5 つの選択肢 (1. 一年以内 2. 1-2 年 3. 3-5 年 4. 5-10 年 5. 一日 1 時間では無理) が用意されており, 多くの学生が 3 年から 5 年で話せるようになると回答している ($M=2.82$)。外国語を理解するよりは話すほうが簡単だ (項目 25, $M=3.17$), 英語は聞いたり話したりするより, 読んだり書いたりするほうが簡単だとはあまり考えていない (項目 34, $M=3.04$) ことから, 4 技能 (聞くこと, 読むこと, 書くこと, 話すこと) をバランスよく習得することが外国語習得の鍵だと考えている学生が多いことがうかがえる。

3.1.4 外国語学習の特質

次に Table 3 に Horwitz (1987) に基づいて分類した 5 つのカテゴリーのうち外国語学習の特質についての結果を挙げた。

項目	M	SD
8. 英語を話すためには, 英語が話されている国の文化にえついて知ることが必要だ	2.67	1.02
12. 英語を話す国で英語を学ぶことが最善だ。	2.07	0.95
17. 外国語を学ぶ上で最も重要なことは語彙を学ぶことだ。	2.56	0.97
23. 外国語を学ぶ上で最も重要なことは文法を学ぶことだ。	2.95	1.02
27. 外国語を学ぶことは他の科目を学ぶこととは違う。	2.59	1.00
28. 英語を学ぶ上で最も重要なことは日本語からどのように英語に訳すかを学ぶことである。	3.07	1.04

1. 非常にそのとおりだと思う。 2. その通りだと思う 3. どちらでもない 4. そうとは思わない
5. 全くそうは思わない

まず「英語を話すためには, 英語が話されている国の文化について知ることが必要だ」については多くの学生がその必要性を感じており (項目 8, $M=2.67$), 「英語圏への留学など英語が話されている国で英語を学ぶことが最善だ」と考えている学生も多い (項目 12, $M=2.07$)。「外国語を学ぶ上で最も重要なことは語彙を学ぶこと」(項目 17, $M=2.56$), 「外国語を学ぶ上で最も重要なことは文法を学ぶこと」(項目 23, $M=2.95$) を重視している学生が多いことから, 文法及び語彙の習得が重要だと考えている学生も多いことがわかる。また「英語を学ぶ上で最も重要なことは日本語からどのように英語に訳すかを学ぶことである」についてはそうでないと考えている学生が多いこと (項目 28, $M=3.07$) から, 単に英訳ができることが英語習得の鍵と考えている学生はそれほど多く

ないようである。「外国語を学ぶことは他の科目を学ぶこととは違う」(項目 27, $M=2.59$) と感じている学生も多くいることが言える。

3.1.5 学習・コミュニケーション方略

次に Table4 には Horwitz (1987) に基づいて分類した 5 つのカテゴリーのうち学習・コミュニケーション方略についての項目をまとめた。

項目	M	SD
7. 上手な発音で英語を話すことは重要だ。	2.21	1.04
9. 正確に言えるまでは英語で話すべきではない。	4.05	0.89
13. 英語圏の人に会うたびに私は英語で楽しく会話できる。	4.01	0.97
14. 英語で分からない言葉があるときは意味を推測してもよい。	2.12	0.74
18. 何度も繰り返したり・練習することは重要だ。	1.45	0.69
21. 他人と英語で話すことには抵抗がある。	2.61	1.12
22. もし外国語学習の初心者が英語で間違いをすることを許されたら, 後で正確に話すことは難しい。	3.21	0.85
26. カセット, テープ, CD, MD, iPodなどで英語を練習することは重要だ。	2.04	0.74

1. 非常にそのとおりだと思う 2. その通りだと思う 3. どちらでもない 4. そうとは思わない
5. 全くそうは思わない

上手な発音の重要性を挙げている学生がかなり多いが (項目 7, $M=2.21$), ただ「正確に言えるまでは話すべきではない」と考えている学生は少ない (項目 9, $M=4.05$)。また「外国語学習の初心者が英語で間違いをすることを許されたら, 後で正確に話すことは難しい」に対しては意見が分かれるところである (項目 22, $M=3.21$)。しかし「他人と英語で話すことに抵抗感はある」に対し多くの学生が抵抗感を持っていることがわかる (項目 21, $M=2.61$)。それを裏付けるように「英語圏の人に会うたびに私は英語で楽しく会話ができる」に対してもあまり積極的な反応はない (項目 13, $M=4.01$)。学習方略としては「英語で分からない言葉があるときは意味を推測してもよい」と考える学生は多く (項目 14, $M=2.12$), 「繰り返し練習すること」(項目 18, $M=1.45$), その方法として「カセットテープ, CD, MD, iPodなどの機器を利用すること」が効果的であると考えている学生も多い (項目 26, $M=2.04$)。

3.1.6 動機付け

次に Table 5 に Horwitz (1987) に基づいて分類した 5 つのカテゴリーのうち動機付けについての項目を挙げた。

Table5：動機付け

項目	M	SD
20. 日本人は英語を話すことは重要だと考えている.	2.30	0.93
24. 私は英語圏の人についてより知りたいので英語を学んでいる.	3.65	0.96
29. もし自分が英語を上手に使えるら、よい仕事につける機会に恵まれる.	1.95	0.94
31. 私は英語が上手に話せるようになりたい.	1.75	0.89
32. 私は英語圏の友達が欲しい.	2.62	1.07
1. 非常にそのとおりだと思う 2. その通りだと思う 3. どちらでもない 4. そうとは思わない 5. 全くそうは思わない		

「日本人は英語を話すことは重要だ」と考えている学生は多く（項目 20, $M=2.30$ ）, 「私は英語が上手に話せるようになりたい」の結果（項目 31, $M=1.75$ ）からも分かるように、英語を話せるようになることに重要性をかなり強く主張している学生は多い。Gardner and Lambert (1972) は動機付けをその言語が話されている国についてより知りたいなどという動機付けを統合的動機づけ、試験に合格するため、よい仕事に就くためなど、ある目標を達成しようとする動機を道具的動機付けとしている。項目 24 の「英語圏の人についてより知りたいので英語を学んでいる」($M=3.65$) は統合的動機付けの一例であり、項目 29 「もし自分が英語を上手に使えるら、よい仕事につける機会に恵まれる」($M=1.95$) については道具的動機付けの一例ととらえられる。従って項目 24 と、29 の結果から英語を学習する動機付けとしてはよい仕事につくためという道具的動機づけによるものが高いことがわかった。Table4 で挙げた項目 13 の「英語圏の人に会うたびに私は英語で楽しく会話できる」では過去にはあまり楽しい経験をしていない学生が多いことが明らかになったが、「私は英語圏の友人が欲しい」(項目 32, $M=2.62$) と感じている学生は多いようである。

3.2. ピリーフと大学英語教育への期待の関連性

Horwitz (1987) の 34 項目に加え、横山 (2003) を参考に作成した大学英語教育への期待について 11 項目の結果を付け加え 45 項目全てを含めてピリーフと大学英語教育への期待度の関連を探求するため、記述統計の結果から天井効果、フロア効果の見られた 5 項目については除外し分析を行った。

残りの 40 項目に対して最尤法による因子分析を行った。固有値 1.000 以上のものが 13 個見つかったが、固有値の変化及びスクリープロットを参考に 3 因子構造が妥当であると考えた。その後再度 3 因子を仮定して最尤法・プロマックス回転による因子分析を行った。その結果、十分な因子負荷量を示さなかった項目を分析から除外し、最終的に 14 項目で分析を続行し、5 回の回転後収束した。その後信頼度を確かめるために因子間のクロンバツ

ク係数を求めた。プロマックス回転後の最終的な因子パターン、因子間相関を Table6 に示す。

第 1 因子は 5 項目から構成されており「就職に必要な英語力」と命名した。第 2 因子は 3 項目から構成されており「教養的英語力」、第 3 因子は 6 項目から構成されており「異文化理解のための英語」とそれぞれ命名した。

Table6：因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

質問項目	α 係数	M	SD	因子負荷量			
				I	II	III	
第 1 因子：就職に必要な語力							
42. リーディング力は必要なので大学の授業で高めたい.	1.85	0.73	0.99	-0.10	-0.07		
43. ライティング力 [英作文・電子メールの書き方など] は必要なので大学の授業で高めたい.	2.04	0.89	0.71	0.05	0.06		
33. 外国語は誰でも学べる.	0.85	1.87	0.81	0.52	0.11	0.04	
44. スピーキング力は必要なので大学の授業で高めたい.	2.00	0.87	0.37	0.04	-0.09		
29. もし自分が英語を上手に使えるら、よい仕事につける機会に恵まれる.	1.95	0.94	0.34	0.18	-0.04		
第 2 因子：教養的英語力							
37. 幅広い教養英語は必要なので大学の授業で高めたい.	0.78	2.03	0.81	0.04	0.87	-0.06	
35. 論文読解力は必要なので大学の授業で高めたい.	1.94	0.76	0.24	0.69	0.02		
20. 日本人は英語を話すことは重要だと考えている.	2.30	0.93	-0.04	0.60	0.00		
第 3 因子：異文化理解のための英語							
24. 私は英語圏の人についてより知りたいので英語を学んでいる.	3.65	0.96	-0.14	-0.09	-0.56		
32. 私は英語圏の友達が欲しい.	2.62	1.07	0.19	0.11	0.54		
6. 日本人は外国語を学ぶのが得意だ.	3.57	0.70	0.13	-0.01	0.40		
25. 外国語を理解するより話すほうが簡単だ.	0.71	3.17	0.98	0.25	-0.11	0.40	
41. 異文化理解を深めたい.	2.50	1.02	0.01	0.07	0.40		
4. 英語は 1 とても難しい 2 難しい 3 普通 4 易しい 5 とても易しい	1.98	0.77	0.11	0.06	-0.51		
				因子間相関	I	II	III
				I	1	0.67	0.29
				II	0.67	1	0.18
				III	0.29	0.18	1

まず第 1 因子について項目 33 の「外国語は誰でも学べる」($M=1.87$) と項目 29 の「もし自分が英語を上手に使えるら、良い仕事につける機会に恵まれる」($M=1.95$) は Horwitz (1987) の 34 項目に含まれる項目である。その他の項目、リーディング力を大学で学びたい (項目 42, $M=1.85$)、ライティング力を大学で学びたい (項目 43, $M=2.04$) スピーキング力を大学で学びたい (項目 44, $M=2.00$) は横山 (2003) を参考に Horwitz (1987) の 34 項目に付け加えた項目である。その関連性を平均値の高い順にみると、リーディング力、ライティング力、スピーキング力が自分の将来希望の職業につくためには必要で

あると考えていることがわかる。それに対する意欲であるが、「外国語は誰でも学べる」と現在考えている学生も多く、今後に期待ができる結果となった。ただ今回の結果では学生が必要と考えているリーディング力、ライティング力、スピーキング力というものが具体的にどのようなものなのかを更に検証していく必要がある。

次に第2因子であるが、この3項目のうち Horwitz (1987) の34項目に含まれている項目は「日本人は英語を話すことは重要だと考えている。」(項目20, $M=2.30$)一つであり、項目37の「幅広い教養英語は必要なので大学の授業で高めたい」($M=2.03$)、項目35の「論文読解力は必要なので大学の授業で高めたい」($M=1.94$)の2項目は横山(2003)を参考に付け加えた項目である。因子名を教養的英語力としたが、今回の参加者が大学1年生ということもありどの項目も中々抽象的で実態がつかめない(例えば論文読解力とあるが、英語の論文自体に触れたことがないなど)ものだったのかもしれない。ただ言える事は項目同士の相関も高く、平均値をみても、あいまいながらも教養的な英語力の必要性は感じていると考えた。

最後に第3因子についてであるが、6項目のうち「私は英語圏の人についてより知りたいので英語を学んでいる」(項目24, $M=3.65$)、「私は英語圏の友達が欲しい」(項目32, $M=2.62$)、「日本人は外国語を学ぶのが得意だ」(項目6, $M=3.57$)、「外国語を理解するより話すほうが簡単だ」(項目25, $M=3.17$)、「英語は1とても難しい 2 難しい 3 普通 4 易しい 5 とても易しい」(項目4, $M=1.98$)の6項目は Horwitz (1987) の項目に含まれている項目であり、「異文化理解を深めたい」(項目41, $M=2.50$)の1項目だけが、横山(2003)を参考に作成した項目である。ここで述べておきたいのは Horwitz (1987) に含まれている3項目についてである。Horwitz (1987) に含まれるこれら3項目(項目24, 13, 32)については研究者の中にはその適性に問題があるとして、修正を行って調査をする研究者もいる(Ellis & Tanaka, 2003; 糸井, 2002; 佐藤, 2006)。また参加者の状況に応じて修正をすべきだという研究者もいる(Mori, 1999)が、今回の調査では原文をあえてできるだけ変えずに調査を実施した。そのためこの2項目(項目24, 32)と項目41の関連を更にみるために相関分析(ピアソン)を行った。その結果2項目とも、とも高い正の相関を示した(項目24, $r=.260$, $p<.001$)、(項目32, $r=.428$, $p<.005$)。この結果から第3因子の名前を「異文化理解のための英語」と命名するに至った。第3因子の内容であるが、英語が得意になれば(項目6, $M=3.57$)、(項目4, $M=1.98$)、英語圏の友人もでき、(項目32, $M=4.01$)、異文化理解を深めることもできる(項目41, $M=2.50$)と感じている学生が多いと考えられた。

5. 結論

本研究では1. 現在受け持っている大学一年生がどのようなピリーフを持っているのか、2. そのピリーフと大学英語教育への期待度にはどのような関連があるのかを調査することが目的であった。研究の1. ついては Horwitz (1987) のBALLIを用いて検証した。その結果、今までは英語の学習について十分な成果を上げていると感じている学生は少ないものの、英語を習得したいという願望は持ちつづけており、そのためには4技能をバランスよく修得することが必要だと考えている学生が多いことが示された。ただ気になる点として、その方法として語彙と文法の習得に偏った考えをもっている学生が多いことは、今後授業を進めていく上で何らかの手立てを考えていく必要がある。

2. に挙げたピリーフと大学英語教育への期待度との関連調査からは、まず将来希望している職種に就くためにはスピーキング力だけでなく、リーディング力、ライティング力が必要であり、その習得にも力を入れたいと考えている学生も多く、また本学の英語教育に期待していることも分かった。今後は学生が必要としている英語力とは具体的に何かについて分析を続け、学生の期待に更に応えることができるカリキュラム作りが必要であると考えられる。

この期待に応えるためには授業時間内だけでは困難であるため、いかに個人に適した学習方略を学生がうまく見出させ、自律した学習方法を見出せるかが鍵になる。本研究では質問紙調査を通じて学生の傾向をつかんだに過ぎない。Horwitz (1987) が言うように学生一人一人には違ったピリーフがあり、その固有のピリーフが学習者の学習方略に大きく影響していることを考えると、今後はできるだけ学生一人一人に合った学習方略を見出させる方策も必要になる。そのためには選択で行われている少人数授業を更に発展させる必要もあると考えられる。

また現在本学では学生の語学力養成のために部分的にCALLが展開されているが、本研究の結果から、メディア媒体の利用を有効な学習方略として挙げている学生も多い点、十分な成果を挙げるためには授業時間以外に学習時間が必要な点を考えると、その一助としてCALLなども積極的に導入する必要があると考えられる。

引用文献

- Dornyei, Z. (2001). *Motivational Strategies in the language classroom*. New York: Cambridge University Press.
- Furuoka, F. & Nikitina, L. (2006). Re-examining Horwitz's beliefs about language learning inventory (BALLI) in the Malaysian context. *Electronic Journal of Foreign Language Teaching*, 3(2), 209-219. Retrieved June 9, from <http://e-flt.nus.edu.sg/v3n22006/nikitina.htm>
- Gardner, R. C., & Lambert, W. E. (1972). *Attitudes and motivation in second language learning*. Rowley, MA: Newbury House
- Horwitz, E. K. (1987). Surveying student beliefs about Language learning. In A. Wenden & J. Rubin (Eds.), *Learning Strategies in Language Learning* (pp. 119-129). Englewood Cliffs, NY: Prentice Hall.
- Horwitz, E. K. (1988) The beliefs about language learning of beginning university foreign language students. *Modern Language Journal*, 72 (3), 283-294
- 片桐準二. (2005). フィリピンにおける日本語学習者の言語学習Beliefs—フィリピン大学日本語受講生調査から—, 国際交流基金日本語教育紀要, 1, 85-101
- 深山晶子 (編), 野口ジュディー (監). (2000). ESPの理論と実践 これて日本の英語教育が変わる. 東京: 三修社.
- Mori, Y. (1999). Epistemological belief and language learning beliefs: What do language learners believe about their learning? *Language Learning*, 49 (3), 377-415
- Nunan, D. (1988). *The learner-centered curriculum*. New York: Cambridge University Press.
- O'Donnell, K. (2003). Uncovering first year students' language learning experiences, attitudes, and motivations in a context of change at the tertiary level of education. *JALT Journal*, 25 (1), 31-62
- 佐藤敏子. (2006). 学習信条と学習効果—BALLIを使用した調査—, つくば国際大学研究紀要, 12, 1-16.
- Tanaka, K. & Ellis, R. (2003). Study-abroad, language proficiency, and learner beliefs about language learning. *JALT Journal*, 23, (1), 63-85
- Yang, N. (1999). The relationship between EFL learners' beliefs and learning strategy use. *System*, 27, 515-535.
- 横山彰三. (2004). ESP教授法に基づく大学専門英語教育のための効果的シラバスと教材開発の研究. 平成15年度～平成16年度科学研究費補助金 (基盤研究◎) 研究成果報告書 研究課題番号 15520362. Retrieved May 29, 2009 <http://tamada.med.miyazaki-u.ac.jp/scientific/scientific2005.pdf>